

巨大津波イメージを

東日本大震災から間もなく一年。県内では、沿岸部の津波浸水予測図を作り直すなど、巨大地震と津波への備えを見直す動きが始まった。一方、福島第一原発事故による放射能汚染から健康や農作物を守る戦いは、これから続く。被災地から県内に避難した人々の暮らしへの不安も消えない。震災の爪痕と対策の現場取材した。

二月の週末の深夜、薄暗い地下鉄の車内に、乗務員の声が響いた。

「お客さまにお知らせします。津波警報が発令されたため、津波の浸水が予想される横浜駅を避け、安全な三ツ沢下町へ車両を移動します」

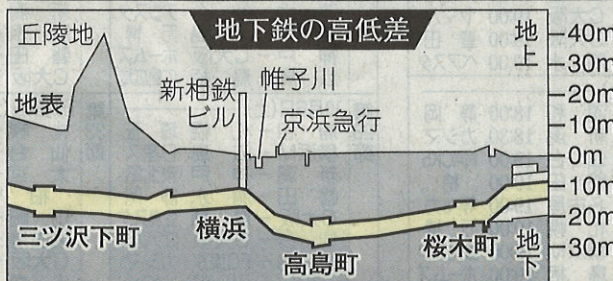
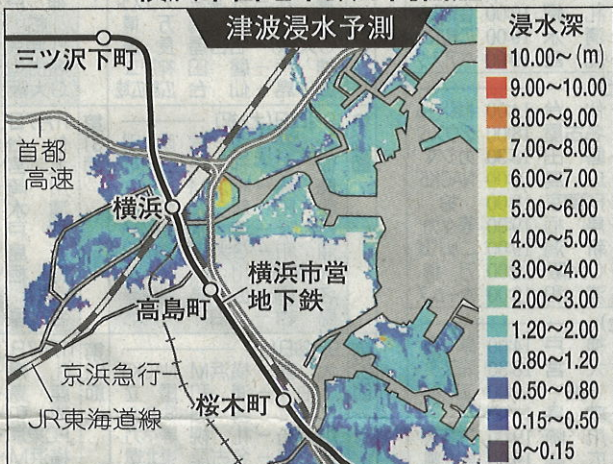
車内放送は続いた。「津波の到達時間には、まだ余裕があります。落ち着いて行動してください」。

1 浸水予測を基に実地訓練



横浜市営地下鉄の非常扉から線路に降りる乗客役の職員ら＝横浜＝三ツ沢下町駅間で

横浜駅周辺の津波浸水予測と横浜市営地下鉄の高低差



進行方向は、横浜駅から三ツ沢下町駅に戻るよう変更された。電力を使わず、

車内は微妙にどよめいた。横浜市営地下鉄は先月十八日未明、終電後の横浜＝三ツ沢下町間で、震度6強の大地震に伴う津波の地下浸水を想定した避難訓練を行った。緊急停車した車両は停電で走行できず、電灯もエアコンも効かない想定だ。

3.11から1年
かながわの現場から

下り坂を利用した惰性走行で数百人戻った後、乗客役を務めた百五十人の市職員は、先頭車両の非常扉から線路に降り、駅までの約六百メートルを歩いた。全員の避難が終了したのは、緊急停車から三十四分後。津波の到来は、地震発生から七十分後の想定だ。参加した乗客役の京念屋一郎さん(三三)は「訓練だから落ち着いて対処できたが、本当に背後から津波が

迫ったら、不安で乗客が出口に殺到すると思う」と、緊張感をにじませた。市営地下鉄が訓練の参考にしたのは、県が東日本大震災の後にまとめた津波浸水予測図。過去最大規模の地震が発生した場合、河口に近く地盤が低い横浜駅周辺は、最大四メートルの津波が押し寄せ、深さ最大九メートルの水が起きる想定だ。地下鉄の駅や線路にも水が押し寄せることになる。予測を主導した柴山知也・早稲田大学理工学術院教授は「千年に一度の巨大津波は、防波堤などの構造物ではなく、避難で対応すべきだ」と指摘する。市営地下鉄の訓練については「地下街や地下鉄には多くの通路や換気口があり、浸水を防ぐのは難しい。津波警報が出たら、地下は誰もいない状態にすべきだ」と評価した。課題は、訓練を一過性の取り組みに終わらせない意識改革だ。柴山氏は強調する。「二日の行動パターンの中で、地震が起きたらどうするか。一人一人が具体的なイメージを持つてほしい。それを、次の世代にも引き継ぐことが、今後の課題だ」(新開浩)